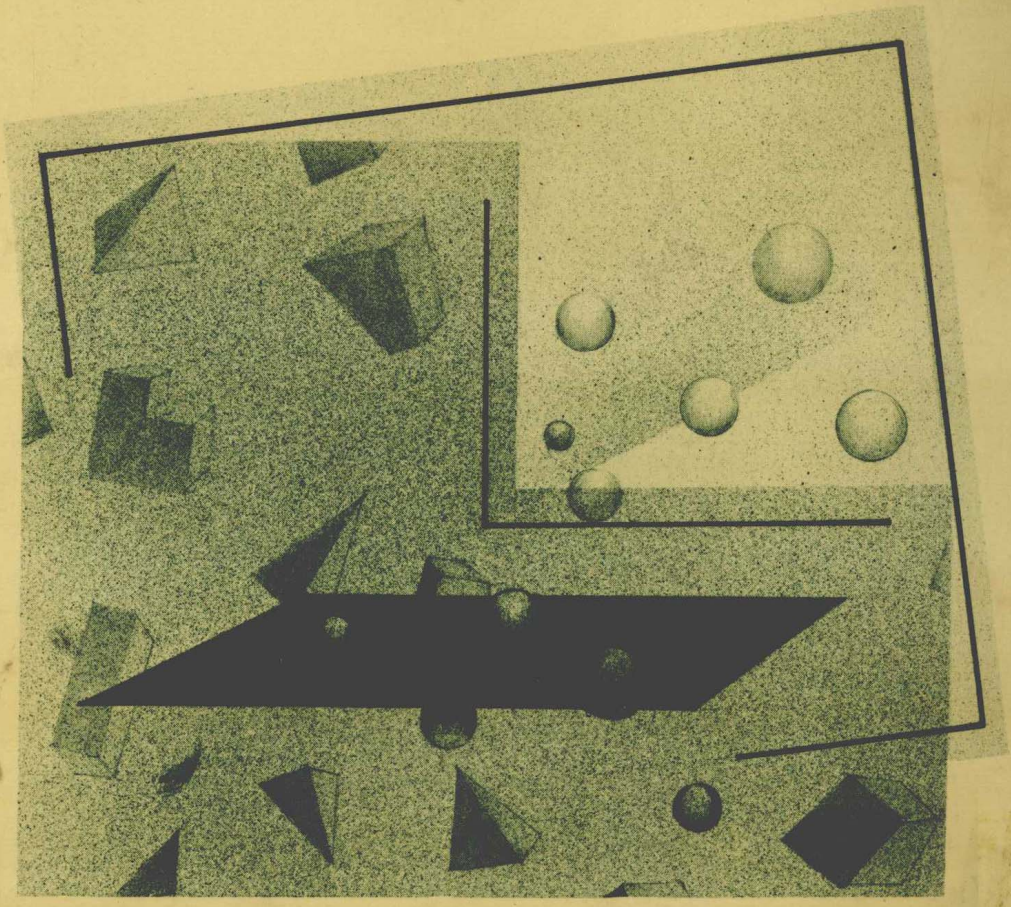
経済学とイデオロギー

経済学史の方法をめぐって

上野俊樹著



有斐閣

経済学とイデオロギー

経済学史の方法をめぐって

上　野　俊　樹　著

有　斐　閣

著者略歴
1942年　大阪府にうまれる
1973年　大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程修了
現　在　立命館大学経済学部助教授

経済学とイデオロギー

昭和57年5月20日　初版第1刷印刷
昭和57年5月30日　初版第1刷発行

定価 2,900円

著作者　上野俊樹

発行者　江草忠允

発行所　東京都千代田区神田神保町2～17
株式会社有斐閣
電話東京(264)1311(大代表)
郵便番号〔101〕　振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕　文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕　左京区田中門前町44

印刷・内外印刷株式会社　製本・新日本製本株式会社
© 1982, 上野俊樹. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-641-06381-8

はしがき

私が本書を著した直接の動機は、現実の切実な経済問題の解決に、経済学史の研究がどのように関係するかを明らかにしたい、ということであった。経済学史の研究は、一般には過去の経済学的認識(史)のみを対象とする研究分野であると考えられており、こうした考え方では、経済学史的研究は結局のところ、既知の認識の内部にとどまることになる。しかし、科学の使命は新しい法則の発見にあり、これは現実を分析することによってしかおこないえない。われわれの認識の発展は、過去の理論が現実の事実を十分に説明するものではないという問題意識が生まれ、それが出発点となって現実の分析がおこなわれる場合に生じる。したがって、経済学史の研究が既知の認識の内部にとどまっているかぎり、そうした研究が新しい法則を発見することは一般にはありえないであろう。

かつて、経済学史の研究にたずさわる人々が、『経済評論』(一九五四年四月号)誌上で、「経済学の論理と人間の問題」というテーマで座談会をおこなったことがある。ここで討論されたことは、形式的には経済学の一般的問題のようでもあるが、その内容は経済学史の意義と方法についてであった。しかし、この座談会は、過去の理論の研究がどのようにして現実の切実で具体的な経済問題の解明に結びつくか、あるいは、そうした問題の解明に寄与する経済学史研究はどうあらねばならないのかということについて何かを明らかにしたわけではない。それから三〇年をへた今日においても、事態はそれほど変化しておらず、経済学史の研究は現実の分析との有機的

な連関を欠いたまま、解釈学の深い泥沼のなかに沈んでいる。

考えてみれば、学説史的研究として必ずとりあげられるスミス、リカードウ、マルクス等の諸理論は、彼らが生きた時代の経済的問題と格闘し、それを分析したものであって、だからこそその理論は真理として今日まで保存されているのである。時代と格闘しないで、既知の理論にのみ拘泥する解釈学は、それが対象とする古典の科学的精神からはるかにへだたったところに存在しているといわねばならない。しかし、こうしたことを嘆くだけでは仕方がない。むしろ、なにゆえにそうした解釈学が生まれるのかを明らかにしなければならないであろう。

その理由は、第一に、ヘーゲル主義が克服されていないこと、すなわち、認識の発展の動力をカテゴリーの内部の矛盾にみる、という考え方が克服されていないことである。第二に、現実の分析的研究が、その不可分の一環として学説史的研究を含んでいるということ、また、学説史的研究は、現実の分析的研究と一体となっておこなわれてこそ、本当の意味での科学的な学説史の研究になる、ということが明らかになっていないことである。第三に、本書の第九章〜十一章でとりあげた「思想史的方法による学説史的研究」の問題である。これは、一見すれば、現実の分析を一つのモメントとしてとりこんだ方法のようにみえるのであるが、実は、イデオロギー的認識の立場よりする解釈学であって、けっして現実の分析と有機的な関連をもった学説史の研究ではない。

ところで、本書が課題としたのは、こうした解釈学の誤りを指摘することとともに、この誤りが人々に受け入れられる理由を、もっと一般化して考察することであった。

それをてみじかにいえばこうである。人々の認識はイデオロギー的認識と科学的認識の二重の、次元を異にする認識からなっている。人々はその実践的な生活をイデオロギー的に、すなわち、自分たちの存在の現実的条件を想像的な関係において表象して生きているのであって、その現実的生活の条件を全面的に科学的に把握して生きているわけではない。ここに、たとい「虚偽」であっても宗教的イデオロギーを人々が受け入れたり、その他

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の非科学的認識を受け入れたりする現実的な理由があるのである。

こういう現実的な理由があるからこそイデオロギー的な立場よりする解釈学――たとえば「市民社会論」――が、現実の科学的分析をおこなわないままにイデオロギー的願望を古典の解釈として示す、といった場合、その解釈が科学的認識ではなくても、イデオロギーのうえでは一定の意義をもつのだということは考慮されねばならないのである。

また、科学的認識は、人々の生活を導く実践的意識でなければ意味をもたないのであるから、それは科学的イデオロギーに転化して人々のなかにもちこまれなければならない。そして、科学は、イデオロギーのなかに自らを発展させようとする真の要求をくんでこなければならない。宇野説はこのことを理解しないのである。

こうしたことから、本書ではやや立ちいってイデオロギーの分析をおこなっている。

以上が本書を導いている問題意識であるが、本書は、見田石介氏の諸業績を前提として書かれているので、それらに詳しくない方には、第五章から読んでいただいてもよいと思う。

本書の出版にあたっては、いろいろな方のご厚意に預ったが、とりわけ立命館大学経済学部の後藤靖教授には大変お世話になった。ここで厚く御礼を申しあげる次第である。

一九八二年四月八日

上野俊樹

〔初出一覧〕

第一章〜四章　「経済学史の意義とその方法」(一)、立命館経済学第二七巻一号一九七八年、(二)、同第三〇巻一号一九八一年、(三)、同第三〇巻三・四・五号一九八一年、(完)、同第三〇巻六号一九八二年。

第九章　「スミス分業論の基本的性格」大阪市大論集第一五号一九七三年。

第十章　「内田義彦氏の経済学史の方法と経済学的意義についての一考察」経済学雑誌第六七巻二号一九七二年。

第十一章　「平田清明氏の価値論」立命館経済学第二二巻三・四号一九七三年。

目　次

はしがき

第一章　認識の発展の動力……三
Ⅰ　経験的事実と既知の認識との矛盾……三
Ⅱ　松村一人氏の認識の発展の動力についての理解……四

第二章　松村説の経済学への適用……二〇
——富森虔児氏の経済学の方法——
Ⅰ　論理的矛盾の四つの形態の混同……二〇
Ⅱ　単純な分析的方法における認識の発展の動力……三三
Ⅲ　弁証法的方法における認識の発展の動力……五九

第三章　経済学史の研究・叙述と現実の分析……五五
Ⅰ　現実分析の有機的一環としての学説史的研究……五五
Ⅱ　「経済学批判」の意味と学説史の叙述方法……六〇
Ⅲ　経済学史的研究は「独立科学」か「補助科学」かという論争……六六

第四章　宇野説の経済学史……七二
Ⅰ　宇野「原理論」の概要……七二
Ⅱ　いわゆる「方法模写説」……七六
Ⅲ　「原理論」形成史としての経済学史……七九
Ⅳ　宇野説に従う人々の現代の経済学説の研究についての考え方……九一
第五章　イデオロギーとは何か……九六
Ⅰ　史的唯物論の定式におけるイデオロギー……九六
Ⅱ　物質的社会関係とイデオロギー的社会関係……一〇〇
Ⅲ　社会関係を反映する意識としてのイデオロギー……一〇四
Ⅳ　実践的意識としてのイデオロギー……一〇七
Ⅴ　「自らの発生根拠を知らない意識」としてのイデオロギー……一一八
Ⅵ　階級社会の発生と階級的イデオロギー……一二
Ⅶ　科学的認識とイデオロギー的認識……一四二
第六章　宇野説における科学とイデオロギー……一四五
Ⅰ　科学性と階級性……一四五
Ⅱ　社会科学的認識と「全人類的立場」……一四九

Ⅲ　イデオロギー（階級性）の効用……一五一
Ⅳ　降旗節雄氏の「新たな性格のイデオロギー」と階級性……一五四
Ⅴ　降旗氏の主張する加藤正の意義と限界……一五八
Ⅵ　価値判断と事実判断……一六一
Ⅶ　具体的な実践の「非合理」性……一六六
Ⅷ　理論の抽象性とイデオロギーの具体性……一七〇
Ⅸ　真理の実現過程であるイデオロギー的認識の過程……一七三

第七章　アルチュセールのイデオロギー論 Ⅰ……一七六
――「写鏡的関係内での再認―否認の作用」であるイデオロギー――
Ⅰ　イデオロギー的認識作用……一七七
――「写鏡的関係内での再認―否認の作用」――
Ⅱ　国家イデオロギー装置……一八七
――一般的なイデオロギー形態――
Ⅲ　支配的イデオロギーと経済的社会関係……一九六
Ⅳ　想像上の産物としてのイデオロギーとイデオロギー的社会関係……一九九

第八章　アルチュセールのイデオロギー論 Ⅱ……二〇六
――「科学とイデオロギーの《認識論的切断》」――

Ⅰ　理論的イデオロギーからの認識論的切断……二〇六
Ⅱ　マルクスによる史的唯物論の発見……二一一
Ⅲ　アルチュセールの科学方法論……二二一
むすび……二二九

第九章　スミスの分業論……二三三
——その今日的再解釈によせて——

Ⅰ　科学的認識のレベルでの批判とイデオロギー的認識のレベルでの批判……二三三
Ⅱ　分業による労働一般からブルジョア的労働への移行……二三七
Ⅲ　社会的分業とマニュファクチュア分業の区別と混同……二四六
Ⅳ　分業による単純商品生産と資本制生産の区別と混同……二五一
Ⅴ　分業と生産諸力における改善……二五四

第十章　内田義彦氏の経済学史の方法……二六三

Ⅰ　内田氏の主張の概要……二六三
Ⅱ　内田氏における経済学史の方法の経済学的基礎……二六六
Ⅲ　市民社会論……二七七
Ⅳ　内田氏の資本主義の生成・消滅についての見解……二七九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

V　内田氏の経済学史の方法の基礎にある経済学の方法……二六五
第十一章　平田清明氏による価値論の否定……二九三
I　社会関係一般と経済的社会関係……二九三
II　社会的分業の与える「普遍的利益」……三〇一
III　私的労働……三〇六
IV　労働の二重性……三一
V　交換価値論に解消された「価値論」……三八
——価値法則の否定——
主要引用文献……巻末

経済学とイデオロギー

——経済学史の方法をめぐって——

謹んで本書を見田石介先生に捧げる

第一章　認識の発展の動力

I　経験的事実と既知の認識との矛盾

諸科学はその固有の対象について研究し、その対象に内在する法則の発見を任務としている。このことは人間の思考や認識を対象とする論理学や認識論についてもあてはまることであり、あの思弁的なヘーゲルの論理学も、その合理的核心は人間の思考法則の発見のうえになされた仕事である。最近、マルクス主義的研究と思われるもののなかでも、「論理を構築する」というような言い方がよく用いられるが、この言い方は、唯物論的科学の精神にふさわしいとは思えない。なぜなら、抽象的なものから具体的なものへと順をおって展開し、叙述される理論は、一見「論理の構築」のように見えるのであるが、その展開の一歩一歩ごとに対象が分析され、複雑な対象のそれぞれの側面における法則の発見が理論の叙述、展開の核心となっているからである。このことの理解こそは科学にとって決定的である。新カント派のように、自然科学の対象についてはたんに規則性のみを承認し、したがって発展法則は認めず、社会科学の対象についてはその法則性を一切認めないということになれば、社会科学の任務は「論理の構築」ということにもなるであろうが、唯物論的科学においては、自然および社会が一定の運動法則にしたがって存在していることを、人類の長い認識史が絶えず実証してきたと考えるのである。

法則の発見という任務を果すうえで、諸科学は何よりも対象自体の分析をおこなわねばならないが、何の準備作業もなしにいきなり対象自体の分析が可能となるわけではない。諸科学はそれぞれの固有の研究対象について一定の理論的蓄積をもっており、研究の出発は、対象についての理論史の研究によって与えられる理論的素材と、対象からえられる経験的事実あるいはそうした事実についての直観、感性的な認識をつきあわせることによって始まる。その対象が歴史的な変化をこうむらない場合でも、人間の認識が多かれ少なかれ相対的真理であるということから、またとくに、社会科学の対象についてはそれが一般に歴史的に変化、発展するということから、このつきあわせという認識過程のなかで既知の理論が多かれ少なかれ新しい経験的事実と矛盾していることが発見され、したがって、既知の認識は新しい経験的事実をより完全に反映するために絶えず変革を求められることとなる。

したがって、認識の発展の動力は、新しい経験が与える事実と過去の理論、認識との間にある矛盾である。新しい理論とはこうした矛盾の自覚のうえにたって、新しい経験的事実を徹底的に分析して発見された、かつて未知であった法則の叙述にほかならない。こうした見地は自明のことのように思われるのであるが、一般的に承認されているわけではない。そこで、なぜ承認されていないのかについて以下に考察する。

II　松村一人氏の認識の発展の動力についての理解

一　松村一人氏の所説を検討する意義

宇野弘蔵氏らに代表的にみられる経済学の方法論は、事実を分析しそれを理論にかえ、その理論を新しい経験的事実につきあわせ、それが新しい経験的事実の説明にとって不十分であることを示し、そこで新しい経験的事実の分析によってえられた認識を先行する抽象的な理論につけ加えることによって理論の真理性をたしかめることが理論の発

展とは考えないで、理論の発展や理論の歩みをカテゴリーや理論の自己発展の過程あるいは先験的演繹の過程とみるとともに、また論理の歩みがその細部にわたってどこまでも現実の歴史的過程に照応するとみるヘーゲル主義をその核心としている。

このヘーゲル主義の一つの根本的特徴は、論理の前進は先行する理論やカテゴリーがその内部にもつ自己矛盾によって後続する理論やカテゴリーに移行、発展すると考える点にあり、それはいいかえれば論理の前進、理論の発展は過去の認識と新しい経験的事実とのあいだの矛盾を原動力としておこなわれるのではなく、それはただ既知の認識の内部にある矛盾を原動力としておこなわれると考えるものである。したがって、こうした考えにおいては、科学研究は既知の認識だけを素材として、既知の認識内部の論理的非整合、自己矛盾（前後撞着）を批判して、それに整合性を与えることでのみ発展すると解釈されることとなり、事実の分析というその任務が忘れ去られることとなる。ただ、こうしたことを前提としたうえで、『剰余価値学説史』におけるマルクスのスミス批判にみられるように、既知の認識の論理的非整合を批判することは、ある範囲内で一定の意義をもっている。

このヘーゲル主義的見地は、とりわけ経済学史のような学問分野においては克服されていない。その理由は、経済学史が経験的事実を研究するのではなく、過去の経済学の理論、経済学的認識史を対象とする研究であることから、経済学史の研究には経験的事実は入りこまないという考え方が存在することによる。経験的事実が入りこまないとすれば、経済学史的研究は既知の認識の内部にのみその発展の動力をもとめなければならないということになる。これでは、経済学史は既知の認識の論理的整合性を追求する解釈学的研究になってしまうほかはないのである。こうした解釈学的方法に対しては、「はしがき」でとりあげた座談会のなかでも、「解釈学だけでは学問としての意義に乏しい」という見地からの批判がなされ、経済学史のあり方についての模索がなされているし、その後にあらわれた経済学史の意義や方法に言及した論文や著作のなかでも同様のことがみられる。しかし、こうした批判のなかで正しい解

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com